

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月22日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520667

研究課題名（和文） 第二次世界大戦後の「満洲引揚げ」とその歴史意識についての実証研究

研究課題名（英文） “Hikiage from Manchuria” Studies

研究代表者

阿部 安成 (ABE YASUNARI)

滋賀大学・経済学部・教授

研究者番号：10272775

研究成果の概要（和文）：

滋賀大学経済経営研究所が所蔵する「満洲引揚げ資料」は、満洲とそこからの引揚げについての史誌のなかで1つの「正史」といえる『満蒙終戦史』『満洲国史』を編纂するための基礎資料であり、また一方で第二次世界大戦後の引揚げをめぐる援護と補償のために作成されたり活用されたりした当事者たちの記録であり、かならずしも、史誌編纂、援護、補償にかかわって公開されることのなかった1940年代の満洲のようすを伝える記録でもある。

研究成果の概要（英文）：

“Manshuu Hikiage Siryo” (Documents of Repatriation Manchuria:Collection of The Institute for Economic and Business Research Shiga University) are the basis of history about the repatriation of Manchuria and Manchuria, the article for assistance and compensation over the repatriation after World War II. This document is records convey the state of Manchuria in the 1940s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：戦後、満洲、引揚げ、歴史意識

1. 研究開始当初の背景

2003年に滋賀大学経済経営研究所で「満洲引揚げ資料」（以下、本資料、などと略記する）の寄贈を受けて以来、本研究の代表者阿部と分担者江竜とで本資料の整理をおこなってきた。その作業を経て、本資料の概要を、阿部安成、加藤聖文「引揚げ」という歴史の

問い方（『彦根論叢』第348号、第349号、2004年5月、同年7月）や、阿部安成、江竜美子「満洲引揚げ」スタディーズの試み：整理、調査、議論（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 98、2008年4月）にまとめた。

こうした論稿執筆の一方で学会報告もお

こない、2004年12月8日開催滋賀大学経済学部講演会（スピーカー：阿部安成、加藤聖文、佐藤仁史。滋賀大学）や2006年12月23日開催滋賀大学経済学部ワークショップ＆科学研究費補助金基盤研究(B)(1) 蘭班共催「引揚研究のフロンティアをめざして」（スピーカー：阿部安成、蘭信三ほか。京都大学）において本資料についての報告をおこなった。

上記の作業を経て、2007年度には本研究分担者の江竜がおもな作業担当者となって、「満洲引揚資料」の第1次目録を作成し、その書誌情報を滋賀大学経済経営研究所のホームページをとおして、検索可能なデータベースを介して公開した。

本資料の1つひとつには、紙質の悪い酸性紙などが用いられているため、また、本資料の保管場所が温度湿度管理のできない書庫だったため、全体に劣化が進んでいる。そこで、閲覧や複写などによるさらなる劣化から原資料をまもるため、学内の予算措置によって、「満洲引揚資料」全点をマイクロフィルムによって撮影することができた。原資料の保存をはかりつつ、閲覧や複写はマイクロフィルムを用いて資料の公開を進める手立てを施した。

こうして、「満洲引揚資料」の保存と公開につとめていた当時の、第二次世界大戦後の各地からの引揚げ、とりわけ満洲からの引揚げについての研究は、大きく3つの動向に分かれていた。

1 つめが、蘭信三たちによる引揚者などからの聞き取りをもとにした、当事者による体験の再構成とその意味を考察する調査と研究である（たとえば、蘭信三『「中国帰国者」の生活世界』行路社、2000年）。

2 つめが、加藤聖文による関係資料の調査と公開（加藤聖文『海外引揚げ問題と戦後日本人の東アジア観形成に関する基盤的研究』2003～2005年度科学研究費補助金若手研究(A)研究成果報告書、2006年）。加藤はまた、複数の満洲史の編纂や記述のありようから歴史認識を探る試みを展開している（加藤聖文「満洲体験の精神史：引揚の記憶と歴史認識」、劉傑ほか編『1945年の歴史認識：〈終戦〉をめぐる日中対話の試み』東京大学出版会、2009年）。

3 つめが、山本有造や成田龍一らによる、満洲からの引揚げを「記憶」や「経験」という歴史学のあらたな視角をふまえて論じたり、あるいは、引揚げという出来事をあらわす史料（テキスト）の構成と機能を論じたり

する動向である（前者に、山本有造編『「満洲」：記憶と歴史』京都大学学術出版会、2007年、坂部晶子『「満洲」経験の社会学：植民地の記憶のかたち』世界思想社、2008年、後者に、成田龍一「引揚げ」に関する序章』『思想』第955号、2003年11月）。

ここまで記してきたとおりの史料と研究の状況を背景として、わたしたちの研究は始まった。

2. 研究の目的

前記1の史料と研究の状況において、本研究の代表者阿部と分担者江竜とで、「満洲引揚資料」の概要を発表し、また、その史料読解と歴史叙述の方法にかかわる論点や視角としての「記憶」について阿部は、同ほか編『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』（柏書房、1999年）をすでに発表し（同書は前掲坂部『「満洲」経験の社会学』で参照かつ引用される）、前掲山本ほか編『「満洲」』の書評を執筆していた（『週刊読書人』第2688号、2007年5月）。

こうしたわれわれの業績をふまえて、本研究ではつぎの目的を掲げた。

(1) 「満洲引揚資料」の第2次目録としての細目目録をつくりつつ、本資料の全貌をあきらかにすること。

(2) 「満洲引揚資料」を軸として、大学の歴史資料所蔵機関における所蔵史料の保存と公開と活用について考えること。

(3) 「満洲引揚資料」の公開を機縁としてあらたに滋賀大学経済経営研究所に寄贈された2つのコレクションの整理をおこなうこと。

(4) 「満洲引揚資料」の活用法の1つとして、満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、1962年）と満洲国史編纂刊行会編『満洲国史』総論、各論（満蒙同胞援護会、1970年、1971年）の編纂過程をあきらかにすること。

(5) 第二次世界大戦後の日本社会における「満洲」「引揚げ」「戦時 - 戦後」をめぐる歴史意識をあきらかにすること。

これらの個々の作業をとおして、第1に、歴史研究の基礎となる歴史資料をめぐって、その歴史化をはかることを本研究の課題とした。ここにいう歴史資料の歴史化とは、①「満洲引揚資料」という資料群を、「満洲引揚げ」という歴史上の出来事をめぐる記録のなかに位置づけることをいい、ついで②それ

を所蔵する滋賀大学経済経営研究所の歴史のなかに位置づけることをいう。

本研究の第2の課題は、「満洲引揚げ」という歴史上の出来事を軸として20世紀の東アジア-日本の歴史を、文献において再考するとともに、その作業をとおして、われわれの歴史意識を批評するための論点を提示することとした。ここにいう再考とは、①すでにまとめられた満洲や、そこからの引揚げや、それらをふくめた20世紀東アジア-日本の動態を記録した歴史書としての史誌を、その編纂の元となった記録や文書をふまえて、その史誌のなりたちをあらためて考え、その編纂の過程に形成された、あるいは編纂の根源にあった歴史意識をとらえることにあり、ついで②満洲や、そこからの引揚げをめぐる聞き取りというオーラルなドキュメントを素材としたオーラル・ヒストリーや記憶論や、また自己の体験をみずから記録した自分史などに対して、引揚げをめぐる援護や補償や史誌編纂のためにつくられた記録や文書を対置させて、あらためて当事者もふくみつつそれとは隔たりのある主体や機関によってつくられた記録や文書から構成される歴史像を吟味して、歴史がつくられてゆくさいのそうした記録や文書の意味を考え、あわせてわれわれの歴史意識を再考することである。

3. 研究の方法

上記2に記した第1の課題については、「満洲引揚げ資料」を同時代の満洲や、そこからの引揚げをめぐる記録や文書の全体のなかに行き渡る位置づけるために、①本資料がもともと満蒙同胞援護会について国際善隣協会にあった時点では1つのまとまった蔵書としてあったときの、もう一方のおもに図書などの文献をコレクションとして所蔵する拓殖大学図書館を調査すること、②『満洲国史』編纂資料がふくまれる国立国会図書館憲政資料室「片倉衷関係文書」を調査すること、③1940年代の満洲の状況についての記録を閲覧するために外務省外交史料館を調査することとした。

また、「満洲引揚げ資料」が滋賀大学経済経営研究所に寄贈されることとなった1つのきっかけは、同研究所には、滋賀大学経済学部の母体となった彦根高等商業学校(1923年-1944年)が同時代の資料として収集した資料のなかに満洲にかかわる文献が大量にあったことによる。さらには、「満洲引揚げ資料」が同研究所のコレクションとなったことがきっかけとなって、あらたに2つのコレクションが寄贈された。1つは、かつて満洲国の官僚をつとめた人物と、その子息で国際善隣協会の役職を担った人物にかかわる蔵書で

あり、もう1つは、長年にわたって満洲経済史研究に従事した研究者の蔵書である。これらにかかわる歴史資料の整理と公開にむけて、④滋賀大学経済経営研究所雅所蔵する歴史資料のなかで満洲にかかわる文献について、あらためてそれらの書誌情報を整え、かつ資料解題をまとめるとともに、寄贈された2つのコレクションの目録を作成することとした。

さらに、⑤現在、満洲やそこからの引揚げについての文献になにがあり、それにどのようにアクセスし得るかを確認するために、公共図書館(ここではひとまず、東京都立中央図書館と神奈川県立図書館を対象とした)における同文献の所蔵状況を調査した。

上記2に記した第2の課題については、まずは、満洲とそこからの引揚げについての、1つの「正史」といいうる前掲『満蒙終戦史』『満洲国史』を、それらの編纂の基礎となった資料である本資料から問いなおすことを始め、また、さまざまな聞き取りをふくむ体験記を検討の対象とすることとした。

4. 研究成果

本研究はいまだ途上にあって完結していない。これまでに発表した成果については、下記5に掲載したとおりである。また、現在の時点での作業進行情況を示すと、上記3に記した各資料所蔵機関の調査を終了し、滋賀大学経済経営研究所にあらたに寄贈された2つのコレクションについては、その目録作業を終えて、その原稿を確認すれば目録を公開できる段階となっている。「満洲引揚げ資料」の細目録については、現在も目録作業を進めている。

これらの調査報告や目録については、順次、滋賀大学経済学部 Working Paper Series などをおして、冊子体発行とWEB発信の双方を用いて発表してゆく予定である。

滋賀大学経済経営研究所が所蔵する「満洲引揚げ資料」は、

- (1) 満洲とそこからの引揚げについての史誌のなかで1つの「正史」といいうる前掲『満蒙終戦史』『満洲国史』を編纂するための基礎資料であり、
- (2) また一方で第二次世界大戦後の引揚げをめぐる援護と補償のために作成されたり活用されたりした当事者たちの記録であり、
- (3) かならずしも、史誌編纂、援護、補償にかかわって公開されることのなかった、1940年代の満洲のようすを伝える記録でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計4件)

①阿部安成、永田英明、大学史関係資料の保存と公開と活用について：滋賀大学経済経営研究所と東北大学史料館を事例として、滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 125、2010年、1-16頁、査読無。

②阿部安成、平井孝典、デジタル化の誘引：滋賀大学経済経営研究所と小樽商科大学百年史編纂室を事例として、滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 128、2010年、1-9頁、査読無。

③阿部安成、コメント、記録と史料 No. 20、2010年、48-49頁、査読無。

④阿部安成、多声のエスノグラフィを記述する試み：坂部晶子『「満洲」経験の社会学』を読む、滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 133、2010年、1-17頁、査読無。
*滋賀大学経済学部 Working Paper Series については以下の URL にて公開。
<http://mokuroku.biwako.shiga-u.ac.jp/WP/index.htm>

[学会発表] (計1件)

①阿部安成、江竜美子、滋賀大学経済経営研究所の事例、シンポジウム「近代東アジア歴史研究の現状と既存史料の有効利用／The State of History and the Effective Use of Extant Sources」国際日本文化研究センター&旧植民地関係資料に関する研究グループ共催第Ⅲセッション「東アジア関連研究資料のデジタル化について」、2010年3月5・6日、国際文化研究センター（京都府）

②阿部安成、滋賀大学経済経営研究所所蔵“彦根高等商業学校関係資料”の保存と公開と活用について、一橋大学福田徳三研究会、2009年10月26日、一橋大学附属図書館（東京都）。
*本発表については以下の URL にて公開。
<http://fukuda.lib.hit-u.ac.jp/activity/workshop/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 安成 (ABE YASUNARI)
滋賀大学・経済学部・教授
研究者番号：10272775

(2) 研究分担者

江竜 美子 (ERYU YOSHIKO)
滋賀大学・経済学部・助手
研究者番号：50242970